

ヨハネの黙示録が宛てられた小アジアの七つの教会の中で、今日は五つ目の教会である「サルデイス教会」である。場所については最後のページにある地図を参照。現在はマニサ県のサルト(Sart)。前回のティアティラ(現在のアクヒサル Akhisar)から直線距離で約45キロ。

サルデイスは、かつて巨万の富を誇ったリディア王国(聖書付録の地図1「聖書の古代世界」参照)の首都であり、砂金(パクトロス川)や世界初の金・銀の硬貨鑄造、そして羊毛の染色産業(サルデイス・マントなど)で栄えた非常に裕福な都市であった。考古学の研究によると、サルデイスでは、巨大なローマの浴場と体育館の複合施設や、そのすぐ隣に、大規模なユダヤ教の会堂(シナゴグ)が発掘されている。これは、当時のユダヤ人(および初期キリスト教徒)が、異教のローマ文化と深く同化(妥協)し、社会的な摩擦を避けて平和に共存していたことを示しているという。

スミルナやペルガモンの教会が激しい迫害に遭っていたのに対し、サルデイス教会には迫害も、ニコライ派のような目立った異端の記録もない。一部の研究者たちは、「サルデイス教会がサタンから攻撃されなかったのは、彼らがすでにこの世と完全に同化しており、サタンの領域に対する脅威ではなくなっていたから(すでに霊的に死んでいたから)だ」と指摘している(ヨハネによる福音書15章19節参照)。

また、この都市は切り立った崖の上の難攻不落の要塞(アクロポリス)を持っていたが、歴史上二度(紀元前549年のペルシャ王キュロスによる陥落と、紀元前214年のアンティオコス大王による陥落)、見張りの兵士が「居眠りをして油断した」ために、夜間に崖を登られてあっけなく陥落したという有名な歴史を持っている。

1節.

「神の七つの霊と七つの星とを持っている方が、次のように言われる。『わたしはあなたの行いを知っている。あなたが生きているとは名ばかりで、実は死んでいる。』」

ここではイエス・キリストを「神の七つの霊(完全な聖霊の力)と七つの星(教会の信徒たち)を持つ方」として紹介している。サルデイス教会は、周囲からは「生きている(活発な素晴らしい教会だ)」という「名(ὄνομα、オノマ《評判》)」を得ていた。しかし、全知の

イエス・キリストの目には「死んでいる(νεκρός、ネクロス)」と宣告される。外形的なプログラムや過去の栄光はあっても、イエス・キリストへの生きた信仰と聖霊の躍動を失った「名目上のキリスト教」の典型的な姿であると言える。

2-3節.

「目を覚ませ。死にかけている残りの者たちを強めよ。わたしは、あなたの行いが、わたしの神の前に完全なものとは認めない。だから、どのように受け、また聞いたか思い起こして、それを守り抜き、かつ悔い改めよ。もし、目を覚ましていないなら、わたしは盗人のように行くであろう。わたしがいつあなたのところへ行くか、あなたには決してわからない。」

「目を覚ませ」と訳されている言葉(γρηγορέω、グレゴレオ)は、継続的な警戒と覚醒を命じる言葉。また「強めよ」(στήριζω、ステリゾ)は、基礎を再び固めることを意味する。

イエス・キリストが「盗人のように(思いがけない時に)行く」という警告は、難攻不落を誇りながら見張りが眠りこけて二度も奇襲で陥落したサルデイスの屈辱的な歴史に対する、痛烈な皮肉と霊的な警告となっている。彼らは、かつて福音を「どのように受け、また聞いたか」という原点に立ち返り、悔い改め(方向転換)をしなければならなかった。

4節.

「しかし、サルデイスには、少数ながら衣を汚さなかった者たちがいる。彼らは、白い衣を着てわたしと共に歩くであろう。そうするにふさわしい者たちだからである。」

サルデイスは羊毛の染色(特に赤や紫)で有名な町であったが、イエス・キリストは世俗の罪で「衣を汚さなかった」少数の残りの者を称賛する。彼らには、イエス・キリストの義の転嫁と聖化の勝利を象徴する「白い衣」が与えられ、王であるイエス・キリストの凱旋行列を共に歩く特権が約束される。

5節.

「勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。わたしは、彼の名を決して命の書から消すことはなく、彼の名を父の前と天使たちの前で公に言い表す。」

「決して命の書から消すことはなく」というキリストの言葉は、「罪を犯せば名前を消されて救いを失うぞ」という脅しや条件付きの警告ではない。原文のギリシャ語では極めて強い否定表現(二重否定)が用いられていて、これは真の信者の名前が消される可能性は万が一にもないという、絶対的な安全の保証(約束)を強調するための修辞技

法である。つまり、一度真に救われた者は神の恵みによって最後まで信仰が守り抜かれるということ。

さらに、イエス・キリストはこの命の書に名がある者たちを、父なる神と天使たちの前で「この者はわたしのものだ」と公に宣言(告白)してくださると約束されている。つまり「命の書」とは、イエス・キリストの恵みによって救われた者の身分が永遠に守られ、いかなる力によっても奪われることがないという究極の保証を象徴している。なおこの言葉の背景にあるのは、この手紙が宛てられた当時、市民の登録簿(名簿)があり、犯罪を働いたり死んだりするとその名が消し去られたことである。

世俗に染まり切ったサルディスにおいて信仰の純潔を守ることは、社会的な不利益を被ることを意味したが、イエス・キリストは「この世の名簿から消されても、天にある「命の書」からあなたの名を決して消し去ることはない」と、究極の永遠の保証を与える。

以上を通して知らされるのは、サルディス教会へのメッセージは、伝統や過去の栄光に寄りかかり、霊的な生命力を失いかけている現代の教会への「命の回復の宣言」である。

死んでいる者に向かって「目を覚ませ」「あなたは生きているのだ」と声をかけ、実際に命を吹き込むことができるのは、死を打ち破って甦られた主イエス・キリストただおひとりである。ペトロが一度信仰を否んで霊的に死にかけた後、キリストの赦しによって立ち直り「兄弟たちを力づける(強める)」者とされたように、サルディス教会にもまだ「死にかけているが、残っているもの」があり、主は決して彼らを見捨ててはおられない。

サルディス教会の悲劇は、「異端の教え」や「激しい迫害」によって破壊されたのではなく、「無関心」「惰性」、そして周囲の世俗社会との「平和な妥協」によって、自ら内側から死んでいったことにある。いつの時代の教会も、キリスト者も、社会との馴れ合いによって得る評判の良さや、日曜日だけの形式的な礼拝活動に満足し、日常におけるイエス・キリストとの生きた交わりを失っている場合、まさにサルディス教会になりうる。

主の燃えるような目は、私たちの外側の活動だけでなく、内なる信仰の真実を見ておられる。「目を覚ませ」という主の御声は、裁きの言葉であると同時に、私たちをもう一度生かそうとする愛の招きである。世の価値観に染まることなく、純粹な信仰(「白い衣」)を保ち続けるなら、主は天の父の御前で「この者はわたしのものだ」と、私たちの名を誇らしく呼び上げてくださる。

黙示録の七つの教会とコロサイ

